

図工・美術指導の可能性を広げる情報誌

造形ジャーナル

ZOKEI JOURNAL

2013
Vol.59-1
No.421

造形ジャーナル

2013
Vol.59-1
No.421

発行所 開隆堂出版株式会社
編集兼発行人 大熊隆晴
〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1
印刷所 株式会社平河工業社
2013年11月1日発行

03-5684-6121(営業) 03-5684-6118(販売) 03-5684-6117(編集) / 振替 00130-8-73296



ふせなみさき 「部瀬名岬」(木版裏手彩色/47×61cm)2000年 なか ぼくねん 名嘉 睦稔
作家は表紙裏のART ESSAYを執筆しています



「空にはばたくペガサスの親子」
(木切れ、間伐材テープなど/高さ28cm)
埼玉県伊奈町立南小学校 4年



「不思議な感じのする民家」
(水彩用紙、水彩絵の具、サインペン/38×54cm)
佐賀県伊万里市立立花小学校 5年



「うんどうかい」
(水彩絵の具、クレヨン/54×38cm)
北海道札幌市立北光小学校 2年



「神様のいたずら」
(写真、イラストコピーなど コラージュ/21×29cm)
新潟県上越市立春日中学校 3年

特集 教科書に一味加えて

開隆堂



開隆堂出版株式会社

本社 〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1 ☎03-5684-6111

北海道支社 〒060-0061 北海道札幌市中央区南一条西6丁目11番地札幌北底ビル8階 ☎011-231-0403
東北支社 〒983-0043 仙台市宮城野区萩野町1-11-1 萩野町Mビル2階 ☎022-782-8511
名古屋支社 〒464-0802 名古屋市千種区星が丘元町14番4号 星ヶ丘プラザビル6階 ☎052-789-1741
大阪支社 〒550-0013 大阪府大阪市西区新町2-10-16 ☎06-6531-5782
九州支社 〒810-0075 福岡県福岡市中央区2-1-5 F Y C ビル3階 ☎092-733-0174

同じ感動



なか ぼくねん
名嘉 睦稔 (版画家)

沖縄県出身。版画作品は、裏手彩色と呼ばれる技法で制作されている。ダイナミックかつ繊細な表現で彫刻、琉歌、作詞、作曲など様々な分野で日々旺盛に活躍している。
名嘉睦稔オフィシャルウェブサイト
<http://www.bokunen.com>

自分から始まる独自のものを求めて画家は苦しむが、実はそんな必要がまったく無いのではないかと今は考えている。同じ感動を語ろうとするのだから、似て当然である。あるとしても、せいぜい少しの違いであろう。少しの違いで、そのわずかが個性というものである。

よくよくしてみると、ボクが描こうと念ずる絵は、ほとんどにおいて、すでに先達が描いている場合が多い。古今東西、あるいは世界の国々に目をやれば、これはもう何をか言わんやである。

「素晴らしい」や「凄い」や「とんでもない」と形容せずには居られない。これ程の感動的なものは二度と世に現れないだろうと、湧き出ずるこころを抑えながら、幾度に思った事だろう。感激の内に、改めてボクが描く必要は何も無いのだと、何度感じたことだろう。これを見ていれば充分で、これ以上のものを描ける気もしないし描こうとも思わない。そうだが、絵描き家の性分は仕方がない。画室に戻れば、描かずに居られないのである。

ゴッホがあれば程の「ヒマワリ」を描いたのに…。ピカソがあれば程激しく人の心を動揺させたのに…。棟方志功があれば程の情念をかき立てたのに…。ボクはまた、何故に同じ事を成そうとするのか。ひきこもごも人の感動は、人間の数だけある。その感動の源はひとつであるとして、それが出る体はまたまったく別であるから、源の感動を違う手で違う口で表現せねばならないのである。それを鑑賞する人も、違う人が表現する同じ感動を繰り返し想わなければならない。我々人類は、その発生の源より、その宿命を保有しているものだと考えるべきなのだ。

人類が発生以来、全体で表現しようとする営みが、芸術と称する感動である。その人員の一人がボクであり、ボクは「林武」や「モネ」や「ベン・シャーン」に繋がっていて、そして後に続くボクの後進と繋がろうとしている。そんなものである。

はばかりする必要は無い。人類全員で感じている同じ感動を人類全員で表現しようとしている。その延長線上に、今、自分がある。本当はそれだけの事である。

CONTENTS

2013 Vol.59-1 No.421

特集 子どもの“キラリ”を求めて

第1回 教科書に一味加えて

- ▶ 図工・美術の授業づくりと教科書
千葉大学 准教授 小橋 暁子 …………… 2
- ▶ 楽しみは図工の教科書開くとき
福島県いわき市立入遠野小学校 高玉 宏太郎 …………… 4
- ▶ 子どもが輝く授業を
千葉大学教育学部附属小学校 小林 恭代 …………… 6
- ▶ 教科書に思いをよせる
東京都柏江市立柏江第五小学校 山野井 誠 …………… 8

私のお気に入りの1点

- 薄布の魅力
国立西洋美術館 主任研究員 寺島 洋子 …………… 10

- これだけは知っておきたい 紙を使いこなす …………… 11

教材研究 小学校

- 生きる喜び その子の主題が生まれる場所
静岡県富士市立岩松北小学校 四條 秀樹 …………… 12

教材研究 中学校

- 鑑賞という「言語活動」～セルフエスティームを育みながら～
佐賀県唐津市立名護屋小学校 校長 牛丸 和人 …………… 14

図工室・美術室

- イメージの広がりを楽しむ図工
神奈川県厚木市立依知小学校 押田 彰子 …………… 16
- 動き出す、ふしぎな世界
埼玉県行田市立西中学校 山口 愛 …………… 16

今月の見つけたよ!

- 「虹の橋をわたるチーターの親子とわたし」 …………… 17

特集

子どもの“キラリ”を求めて



第1回

東京学芸大学附属小金井小学校
授業者：立川 泰史先生

教科書に 一味加えて

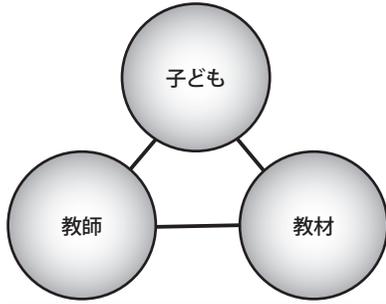
「教科書を教えるのではなく、教科書で教えなさい」という言い古された指摘がある。教科指導において、知識・理解を重視した時代からの脱却を促す教えだったのであろうか。「教科書を教える」と対極にあるはずの図画工作でも、教科書に例示されている作品どおりにつくることが目的だと勘違いしている授業が少なくない。「教科書を教える」意識からの脱却は簡単ではないようだ。

題材設定は料理に似ているという。料理人が材料や用具、調理方法に至るまで一手間も二手間もかけるのは、美味しい料理を食べてもらいたいという思いがあるからだ。題材も同じである。「こんな材料を加えたらおもしろそうだ」程度の一手間で、その味わいは豊かに広がるのである。

教科書の位置づけ

銀杏いもぎすの実が落ちる頃、筆者の勤める大学ではちょうど後期の授業が開始する。

そんな中、高校を卒業して半年経つ一年生へ向けての授業「授業研究入門」が始まる。図工や美術の内容とその教育的な意味をつなげて考える初めの一歩の授業だ。これまで自分たちがしてきたのか、というところから、好き嫌い、得意不得意、年齢ごとのエピソード等、素朴に言葉や形に表すところから「授業」について考え始める。「授業」は、子ども、教師、教材で成り立つ。子どもだけで



授業を構成するもの

「教材」の一つに「教科書」がある

図工・美術の 授業づくりと 教科書

千葉大学 准教授 こばしさとこ 小橋 暁子

も、教師と子どもだけでも成り立たなく、「目的に合った」教材を媒介することで授業が構成されていく。教材とは、教えるための材料や道具であるが、図工・美術の場合は環境や人なども入るだろう。どのようなものが教材に入ってくるのかは、その教科の特性や時代の教育課題や目的によっても変わってくる。そして教科書は、この教材の中に含まれる。

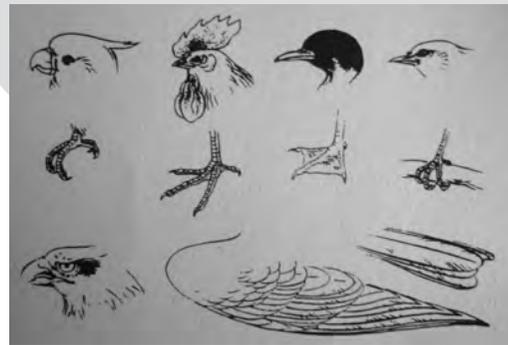
先の授業の中で、教科書を学生に提示すると、手にとりながら「好きなページがあったなあ」

「今と自分たちが使った時のものとどう違うのだろうか」「なぜ『上下巻』なのだろうか」というつぶやきや質問が出てくる。教科書一つからも、その教科の特性、目標、授業構成、重視したいこと等、見えるものが多くある。教科書は、教材が内包するものがはっきりと表れている教材といえるだろう。

教科の特性と教科書

お手本を写していくというこの比重が高かった明治期の図画の教科書とは違い、現代の図工や美術の教科書は、そこに「正しい」形や色が掲載されているわけではない。また最初のページから順番に、知識やその理解を確かめて、次のページに移る内容でもない。オールカラーで写真や絵がたくさん掲載されていて、ページを開く度に違う内容に出合える。そんな図工や美術の教科書の様子は他の教科とも違っている。

理由は、現在の図工や美術の教科書の目標に表れている。現在の教科の目標では、子ども自身が主体的に造形活動にかかわり、その中でそれぞれの子ども



明治43年に発行された国定教科書「新定畫帖」の内容

自身が考えながら学んでいくことに重きをおく。

教師がある事象を教え、子どもはそれを学ぶということよりも、子ども自身が自分なりの表現を模索し表す。ゴールも一つではなく、いろいろなどころにある教科なのである。そのため教科書の内容には、多様性が求められる。

このような背景から、現在の図工や美術の教科書には、多くの作品や、さまざまな表現様式、方法、材料等が掲載されている。また、それぞれのゴールへ向かうための活動で重視したいプロセスや、子どもたちがスター



現在の図工教科書紙面には、多様な主題や技法、様式などの多様性、発想までのプロセスなどが記載されている。

トするためのきつかけ、考えるための方法等も書かれている。教科書は、そのように教科の目標をもとに、学習指導要領に大枠で書かれた内容を、多様な作例、その活動で大切にしたいところ、というように具体的な内容に「つないで」いく働きをする。

“味付け”の工夫

では、教科書を教材として、授業の中でどのように使っていくことができるだろうか。

目標を具体化し、めあてや評価の観点、各過程での方法も書かれているならば、掲載されて

いるものを崩さず、そのままつくったり描いたり、同じものを見たりすればよいのだろうか。これは、授業づくりと合わせて考える必要があるだろう。

授業づくりを料理づくりに例えてみると、教科書は料理のレシピともとれるかもしれない。しかしそのレシピを見てつくる際も、料理づくりは、現実にあるもの、対峙しているものを考えながら、具体的には、どのような状況で、誰に食べてもらうのか、パーティーなのか、日常の食事なのか、好み、人数、材料、時間、予算…等を考えてアレンジしながら、実際につくっていくだろう。

食べる人によっては、野菜をみじん切りにするのか、あえてかまないと食べられないように大きく切るのか、同じ食材でも相手に合わせて出し方を変える。これは授業づくりとも重なる。

つまり、同じ内容の授業でも、目標、対象者が変われば、その指導法も変わるであろうし、作品としても教科書とは異なる現れ方となるだろう。そのような中で、教科書に掲載されているものを絶対とするのではなく、

食べる側の体調や様子、目的が変われば味付けやつくり方を変えるように、活動のつくり手である教師がアレンジをしていくことが大切であり、そのことができるよさが図工や美術にはある。



同じ材料を用いる場合でも、材料自体をつくることに意味がある場合もあれば、自分なりの主題性を探すことに意味をもたせている場合もある。(右：千葉県東金市立源小学校、左：千葉大学附属小学校 粘土実践より)

授業づくりで重要なことは、教科書に掲載されているものは崩せないということではなく、子どもたちの実態、目標、状況等をとらえ、デザインし直せる、変えていけるものであるという認識に立つと、目の前の子どもたちに合うものとなるだろう。

メッセージを届ける

図工や美術の教科書は、そのページをめくりながら「こんなことができるんだ!」と子どもたちの興味を高める導火線ともなる。興味や関心は、子ども自身から出発していくことを主体とする造形活動においては、表現するためのエンジンである。

図工・美術という教科は、子どもたちに対して、「自分」から出発して世界をつくっていくてよいのだ」というメッセージを内包している。

教科書の内容に教師なりの味付けや工夫をすることで、どこでも同じ内容ではなく、その先生、その子どもたちだからこそできる内容に変化していく。そのことで教科がもつメッセージを子どもたちに届ける「授業」となるのではないだろうか。

はじめに

子どもたちは、図工の教科書を開くのを楽しみにしている。

図工の授業の前、教科書のページをめくり、「今日は何をやるのかな」「ぼく、今度はこれやりたいな」と話しながら待っている子どもたちは本当にうれしそうな顔をしている。

けれど、私は違った。教師になつてしばらくは、図工の時間の前になると、「どうしよう…」と思いつつながら教科書を開く。その時間はつらかった。子どもたちが図工の時間を楽しみに行っているのもよくわかっている。アンケートをとつても、図工はいつも好きな教科の上位。しかし、国語や算数のように毎日授業があるわけではない図工の授業の準備は後回しになってしまいがちで、十分に教材研究をしないまま授業に入ってしまう。指導が十分でない中でつくり始めた子どもたちの作品は、指導者として「どうしよう…」と思ってしまうものばかり。ふとそれをつくっている子どもの顔を見ると、私以上に「どうしよう…」

楽しみは 図工の教科書 開くとき

たかだま こう たろう
福島県いわき市立入遠野小学校 高玉 宏太郎

という顔をしている。そして、私は図工の教科書に載っている作品を見せながら、それに近づけようと必死になり、指示に無理が出てくる。

授業が始まる前、教科書を見てうれしそうにしていた子が、そのときどんな顔をしていたのか…。思い出すことができない。子どもたちの中にいても、子どもを見ていなかったのだろう。

授業の前に

子どものことを常に見ていたつもりだった。しかし、私が見ていたのは、子どもが私の望む姿に近づいているかどうかであつて、さまざまな思いや願いをもった一人ひとりの子どもの顔ではなかったのかもしれない。

そんな反省から、「授業の前に、まず子どもの顔を思い浮かべよう。そこからスタートしてみよう」と思うようになった。

あるとき、「いつもの場所に道をつくつて…」という題材で授業を行った。この題材は、開いた段ボールを「道」として捉え、そこから活動を広げて、身近な空間を創造活動の場に変えていくというものである。

教科書では、体育館などの広い場所での活動が想定されていたが、子どもたちに合わせてアレンジを加え、教室を活動場所とした。少人数という学級の実態もあるが、子どもにもっとも身近な場所であるということ、そして「何より、以前「長——い紙、つくつて」という別の題材で、新聞紙や広告紙、包装



紙を使って教室全体を表現の場として活動したときの子どもたちの楽しそうな顔が思い浮かんだからだ。

そして、「グループ4人分の机と椅子もすべて素材として使うこと」という条件を加えた。開いた段ボールだけでは、平面的な活動になってしまいかもしれない。前述の題材では、子どもたちは高い位置に新聞紙を貼るために私が用意した脚立まで自分たちのものとして取り込んで活動していた。それを考えると、他のものと組み合わせにくいほうが、この子たちにとつては立体的でダイナミックな活動



になるのではないかと考えた。この子たちとならどんなことができそうか。子どもたちの顔を思い浮かべながら授業について考え、準備していくと、自分が授業をするのが楽しみになった。

授業の中で

実際の授業では、夢中になって活動に取り組む子どもたちの姿がとても印象的だった。その活動の広がりや多様さは私の予想を簡単に超えていってしまうものだった。

高速道路の側壁を段ボールでつくろうとしていたグループが、話し合いを経てイメージ



を変え、机を並べて高架をつくり、その上に道をつくっていった。その高架へ上り下りするための、ひもで動くエレベーターをつくった子もいた。きっとその子は、以前学習したひもで動くおもちゃの仕組みを覚えていて、それを使ったのだろう。そのアイデアのおもしろさに気づき、自分のグループの活動にも取り入れる子や、どうやってつくったのかを聞きながら一緒につくっていく子もいた。

また、机や椅子を倒し、逆さまにした上に段ボールを貼って坂道をつくったグループもあった。できたでこぼこ道に車が走

り、ジャンプしている様子が子どもたちの目には見えるのだ。

段ボールでトンネルをつくり、その中に人が入ると上からおぼけの絵が下りてくる。そのしかけをつくったグループは、他のグループの子たちに入ってほしくてしかたない。周りの子どもたちも、しかけを知っているながら列をつくって入る順番を待っていて、入ってはみんなで大笑いしていた。

そんなふうには子どもたちの顔を見ながら授業をしていくと、一人ひとりが本当にいろいろなことを考え、試行錯誤しながら精一杯活動しているということに気づかされた。

時間いっぱい、手を、体を、心を動かしながら活動する子どもたちの顔は、本当に輝いて見えた。

教科書と子どもの顔

現在も、多忙な毎日が変わらない。図工の授業の準備は相変わらず後回しになることが多いのが実際のところだ。毎時間子どもたちが夢中になって活動する図工の授業ができる自信はないし、「もっとこうすればよ

かった」という反省は尽きない。けれど、図工の教科書を開くときに、まず一番に学級の子どもの顔が思い浮かぶようになった。「あの子はどんな作品をつくろうとするかな」「あの子は、きつと前の時間に熱中していたあの技法にチャレンジするだろうな」「今日はあの子にこんな言葉をかけてあげよう」と思えるようになった。

子どもたちだって、毎日元気で楽しい日々ばかりではない。忘れ物をして叱られることだってあるし、友だちとけんかをする事だってある。

まして、私が担任しているのは東日本大震災を経験してきた福島の子どもたちだ。

それでも、子どもたちが、図工の時間にもものをつくり出していくときの顔を見ると、つらいことや悲しいことを乗り越え、楽しみや喜びに変えていく人間の力強さを感じずにはいられない。

次の図工の時間は、この子どもたちと何をしよう。

子どもたち一人ひとりの顔を思い浮かべると、図工の教科書を開くのが楽しみになる。

図画工作の授業は何のために行うのでしょうか。私は常にこの「何のため」ということを考えてから授業に臨むようにしています。

「こんな人に育ってほしい」という願いがあり、そのために「こんな力をつけたい」という課題を設定し、どんな活動を通してその力をつけていくか考える。その先に題材があるのだと思っています。

この思考なしに授業を行おうとするとどうなるのか。「次は何をやるか」「こうつくらせればいいのか」「こんなふうな絵を描かせればいいのか」というように作品という結果にのみ視点がいつてしまうのではないのでしょうか。そうやって教科書を作品カタログのような存在にしてしまつてはもったいないと感じます。

子どもは、自分が力を発揮している、伸ばしていると実感する時に輝き、喜びの表情を見せてくれる。これを共有できるのは教師の特権だと思います。子どもたちの姿を想像しながら課題意識をもって授業を行うと

子どもが輝く授業を

千葉大学教育学部附属小学校 小林 恭代こばやし やすよ

き、教科書は力強いパートナーになると思っています。

実践題材4年生 「絵の具で遊んで!」

教科書では絵の具遊びを楽しみ、発展として、これを色紙として用いてコラージュするといふ内容で紹介されています。

私は、「自分らしい表現を進んで試し、追求する力をつけ

ること」「遊んでできた画面の美しさやおもしろさを味わいイメージを広げること」をこの授業のねらいと考えました。

そのため次のような点を工夫して授業を実践しました。
・自由にさまざまな技法を試せるように、技法ごとにコーナーをつくり、児童が移動して活動できるようにする。

・発想したことをどんどん試せるように紙のサイズは小さめ(16切)でたくさん用意する。
・児童が自分で方法を発見し、工夫していくことを重視するため、用具の使い方のみ演示する。



・できたものを一回り大きく切った再生紙に貼り、題をつけ感じたことを書き込ませるようにする。ひもで綴ってまとめる。
・互いが画面からイメージしたことを交流させる。

場の設定が 意欲を引き出すカギ

本実践では、6つのコーナーをつくりました。使用する道具と絵の具を置き、自由に使えるようにしました。用意したものは次のとおりです。

- ・スパッタリングコーナー
網・ブラシ・紙・はさみ・絵の具(小皿に入れる)
- ・型押し(スタンプ)コーナー
スポンジに絵の具を染み込ませるもの・キャップや木片等
- ・ビー玉ドライブコーナー
ビー玉・新聞紙でつくった枠・絵の具(カップに入れる)
- ・吹き流しコーナー
多めの水で溶いた絵の具・ストロー
- ・にじみコーナー
大きめの刷毛・おぼん・水を入れた器

・筆コーナー
筆・筆洗・絵の具

これらのコーナーでは、授業の最初に、「道具の使い方ツアール」を開いてごく簡単に演示しました。あまり細かく説明しすぎると、子ども自身が発見する楽しみを奪ってしまうのでざっと短く行います。コーナーには、簡単な説明を書いた表示もつけました。

活動が始まると、子どもたちは興味をもったコーナーからどんどん挑戦を始めました。同じ技法で絵の具の色を変えたりつけ方を変えたりする子。全部の技法を試そうとはりきる子。違う技法を組み合わせて新たな発見をする子。自分の感覚で色や形を感じながら、夢中で取り組む姿が見られました。

自分の好きな感じを大切にしている存分試すことができる、このような場の設定が大切なのではないかと思います。

かかわり合いから学ぶ
子どもたち

また、コーナーに集まる子どもたちの様子を見ていると、

自然とかかわりが生まれ、発想を交換し合っている様子が見られました。

できた画面から、さつそくイメージを広げている様子も見られます。

「水で濡らしたところに絵の具を垂らしたら、ばあつと広がったよ。花火みたい」「ビー玉2個入れて転がしたら色の戦いみたいだ」「色の組み合わせが気に入ったよ。楽しい感じになって、絵の具のお祭りみたい」など素敵な会話がたくさん聞かれました。



イメージを共有する

子どもたちは、この活動自体

をととても楽しみ、イメージを豊かにもっていました。せっかくなので、一人ひとりがもったイメージをみんなでも共有できたらもつと広がっていくなど考えました。そこで、出来た画面を台紙（普通の再生紙で十分だと思います）に貼り、題と画面から感じたことを余白に記入するようにはしました。

内面で感じていることはそのままでは他人にはわかりません。けれど、言語化することで他者にも受け取ることが可能になります。題は、その画面から受け取ったイメージの象徴と言えます。題がつくことで、「ああ、そういうことを感じたんだね」「私もそう思うよ」というようなやりとりが生まれました。

台紙に貼ったら、ひもで綴って1冊の作品集のようにしました。表紙は各自が自由に描きました。

最後に交換し合って感想を交流します。互いの工夫したこと、感じたこと、イメージしたこと、を交流するのとても楽しい時間だったようです。笑顔で会話している姿が見られ、その様子

から、形と色の世界をイメージ豊かに味わっていることが読み取れました。



「何のため」を考えて

同じ題材であっても、課題やねらいが違えば授業のやり方も変わってきます。目の前の子どもたちの課題や実態から、今、どんな力をつけていってほしいのか考えていくことが授業の工夫につながると思います。これからも、「何のため」ということを忘れずに、実践をしていきたいと考えています。

まずはじめに

今回「教科書に一味加えて」というお題をいただいた。

10年足らずの若僧の図工教師が、皆さんに達観したことが言えるほどまだまだ成熟していない。しかし、自分なりに授業づくりの過程で教科書とどうかかわっていけばよいか。このことについて、自分なりに苦しんでいることが述べられればよいと思う。

「教科書を教える」と対極にあるはずの図画工作科。しかし、教科書に例示された作品どおりにつくるのが目的だと勘違いされている授業が少なくない。編集部の方からそうお話があった。私はその言葉が意外であった。それはなぜかというところ、私が現場でさまざまな実践に触れて、感じている感覚に近かったからだ。だから、嬉しかった。結果を過大に重視した作品結果主義に私は疑問がある。なぜなら、子どもたちがつくったり、見たりしている過程で働かせている感性に注目が足りないからだ。だから私は○○方式のよう

教科書に
思いをよせる

まこと いのやま
東京都狛江市立狛江第五小学校 山野井 誠

な考え方には疑問を抱く。教科書どおりの作品をつくることを目的とされることが、とても重要な問題を含んでいるように私は捉えた。これは一人一人の教師自身の抱く子ども観や題材観と関係してくるように思う。

一味とは…何か

一味加えるなど、おこがましいところだが、今年の2年生の

実践からそれにあたるものを紹介する。

教科書1・2年下（開隆堂出版）の『土』つてきもちがいい』を参考にした。

私なりに一味加えて、7月に実践した。その一味とは何か。場所や素材を自分なりに吟味したことがこれにあたると思う。

この授業では積む、引っかく、集める、踏む、顔をくつつけるなどの低学年らしい行為を自然に喚起させたかった。

教科書の写真は野外であるが、野外の活動場所が十分確保できない現状がある。だから図工室でできる工夫を考えた。

活動場所は図工室の作業台の上に乗ることもよしとした。作業台の上も解放したかったのは立ち上がることや足で踏むことを自然に喚起させたかったからである。300kgの粘土の塊で30人の子どもたちに適当な塊で出合させた。この量が適当だったか…。また出合わせ方はどうであったか…。

疑問が残るところもある。しかし、子どもたちが目を輝か

せ、さまざまなことを試してくれた。

その子自身の「感性を働かせながら」の場面を大切に捉えていく。

次の写真は授業の子どもたちの姿である。顔をピタッとくつつけている。または、粘土で足を包んでいる、小さな波に見立てている様子がそれだ。

ねらいは「土のよさや特徴を体全体で感じ、楽しむこと。」「せいせい！かおにねんどをくつつけてもいいの？」と、ある男の



粘土の温度や感触を確かめている様子



児童「小さな波ができたよ」



粘土で足を包み、感触や温度を感じる様子

子が私に尋ねた。「もちろん！」と私は答えた。その様子は真っ直ぐで生き生きと輝いていた。活動の過程で粘土の感触や温度などを確かめる。この行為は自分なりの感じ方で素材とかわわり、感じ方を深めている様子だ。教科書との向き合い方を考える皆さんは教科書とどう付き合っているのだろう。その辺はそれぞれの付き合い方や、距離のとり方があるだろう。

私は教科書を授業づくりの過程で参考として使用している。活動場所はどうか、材料は何を、どの程度の量で、道具は何を使う…、など細かいことは教科書だけでは測れない。それと同時に子どもたちの活動の姿を予測していくことも容易ではない。だから難しいしおもしろい。

しかし、絵や工作の時間、導入時に子どもと一緒に教科書を見るという使用方法は絶対的に避けている。

それはなぜか。それは導入時の「こういう作品をつくってね」という例示は子どもの感じ方や膨らむイメージを奪ってしまう側面が大きいと感じるからだ。

子どもたちは、大人が思っている以上に鋭い。何かを例示する時はこちらもそれなりの覚悟や冷静さが必要なのだろう。教科書をどんな目的で、いつ見せるか、またいつ引込めるかなどのメリハリが大切だと思う。

教科書は視覚的にわかりやすくする効果、もしくは逆効果があることをそれぞれの先生方が押さえておくことが大切なのではないか。

忘れたくないこと

それは目の前の子どもたちの存在である。もともと豊かで一人一人がかげがえのない存在。「この題材で子どもたちにどんな力を身につけさせたいか」、または「どんな経験をさせたいか」こういう教師のハートが大切なのだと思う。ここから教師が離れていくと、授業の中で子どもたちの感性は十分に発揮されない。

題材はもともと君臨している絶対的な存在ではない。常に目の前の子どもたちの実態の中で、揺れ動いているものだと思う。



中学年は素材と場所と友達の存在を多く感じられる題材を大切にしたい。

はじめに

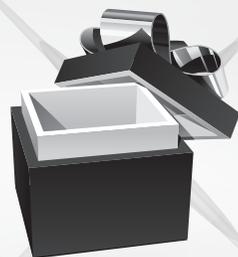
今回、「私のお気に入りの1点」というテーマをいただき、数ある作品の中から一つを選ぶことは難しいなあ、と改めて思いました。そこで、お気に入りの中でも「素材が気になる作品」から「1点」を選んで書くことにします。都合により、選んだ作品の画像を一緒に載せることができないので、文字だけでその作品を正しく伝えられるかどうか不安ですが、想像をたくましくして読んでいただければ幸いです。

《ベール》（1995年）

2006年の冬、六本木の森美術館で、ビル・ヴィオラ（1951年〜）の回顧展「ビル・ヴィオラ：はつゆめ」が開催されました。

ビデオ・アートの先駆者として、1970年代から現在まで第一線で活躍しているビル・ヴィオラは、好きな作家の一人で、それまでに何度か作品を見る機会がありました。その展覧会で初めて《ベール》（1995年）と出会いました。

その作品は、吹き荒れる風のような音が鳴り響く、暗い小ぶりの部屋の中央に



私のお気に入りの1点

薄布の魅力

設置されていました。長方形で半透明のベール（紗幕）9枚が平行に、一定の間隔で連なり、天井からふんわりと吊り下げられていて、部屋の両端に置かれたプロジェクターから、この布の層に向けて片側から男性だけの映像が、反対側から女性だけの映像がそれぞれ投影されていました。

映像は、ビデオ・カメラに近づいたり離れたりしながら歩を進める男女それぞれを撮影したもので、両端から投影された男女の姿は、幾重にも連なるベールを通して中央の幕で重なり合っていました。

二人の関係

ビル・ヴィオラは、生命の誕生、死、再生、あるいは情念といった人間の根源的なテーマを、幻想的に、またドラマチックに表現する作家です。

《ベール》もまた、鑑賞者に多様な解釈を促す、男女の関係を表現しているように思われました。二人は、中央の幕で出合いを果たすかのように見えるのですが、幾重にも連なる紗幕に遮られた光は、中央の幕ですでに弱くおぼろげで、男女の姿をぼんやりとしか映し出していない。出合いを確認することもできず、

映像の中の男女は近づき、そして離れるという動作を永遠に繰り返しているのです。それは、理解し合えずにすれ違う男女の気持ち表しているようでもあり、あるいは逆に、重なり合う互いの人生から抜け出そうと彷徨い続ける男女の姿を表現しているようでもありました。

半透明の紗幕の効果

私は、この作品の幻想的な暗喩にも魅せられましたが、最初に見たときに感じたことを言葉にすれば「やられた！」の一言でした。それは、極細の糸によって織られた薄布の特質が、見事に生かされた美しい作品だったからです。そして、この薄布は、私が学生時代に好んで使った素材でしたが、最後まで表現したいことに生かされなかつた素材でもあったからです。

《ベール》に使われているような薄布の特徴は、布の向こうが透けて見える半透明なところにあります。薄くてもスクリーンとして映像を映し出すことができると同時に、光は透過します。つまり、紗幕の層に向けて映像を投影したときに、像は1枚目の幕に映し出されると同時に、その幕を透りすぎて次の幕に少し拡大されてまた映し出されるのです。そ

これだけは 知っておきたい 紙を使いこなす

○紙の表面の見分け方

水彩画用紙は、絵の具の粒子の定着をよくするため、凹凸が大きいほうが表。見分けがつかない場合は、消しゴムで消して繊維がはがれないほうが表である。また、静かに机の上に置くと縁が少し上に持ち上がっていると裏、縁が机に密着していると表という見分け方があり、これは多くの紙に共通する。

○水張りの方法

水張り技法を使うことで、紙の伸び縮みを気にしない平坦な画面ができる。刷毛などを使って紙の表面全体を水で湿らせる。乾かないうちに水張りテープでベニヤ板やパネルに隙間なく張ることで、絵の具の定着のよい、大きな描画用紙面ができる。

○描画用紙の使い分け

水彩絵の具、色鉛筆、パステル、ポスターカラー、インク等、それぞれに適した紙が市販されているので、使い分けをすることで、描画材料が活かされ、作品の重みや価値を高めることができる。

うしてサイズの異なる像が、紗幕の層に次々と映し出されていました。

しかし、紗幕の片側から作品を見ると、9枚の紗幕すべてが見通せるわけではありません。これが、半透明の布の面白いところで、アクリルやガラスほどの透過性はないのです。ですから、薄布を透過しながら鮮明な映像が届く薄布の層の数は、光源の強さ、布の薄さ（糸の太さと織の密度）、重ねた布どうしの間隔など、さまざまな条件によって変わってきます。

《ベール》では、両端のプロジェクトから投射された男女の映像が、中央の5枚目で出会うように、両側に4枚の紗幕が適当な間隔に調整されて吊り下げられています。

国立西洋美術館 主任研究員 寺島 洋子

表現と素材

作家が考えを形にして表すとき、表現に用いられる材料や手段は、作品の重要な要素となります。材料や手段は、作家独自の表現スタイルを作り出すといっても過言ではありません。

ビル・ヴィオラは、映像をその手段とする作家ですが、その映像を映し出すスクリーンもまた重要な役割を果たしています。「ビル・ヴィオラ…はつゆめ」展には、作品によってサイズや仕立ての異なる複数のスクリーンが使われていました。

その中で《ベール》は、スクリーンとして使われた紗幕に、他の作品とは一味違う存在感があったと思います。登場する男女の関係は、紗幕という脆弱な素材

の上に映し出されたことで、その危うさ、曖昧さが一層引き立っていました。また、二人の動きも、幾層にも連なる紗幕の層に重複して再現されることで立体的で奥行きのあるものになっていったのです。

そして、9枚の紗幕に投影された映像が、紡錘形の光の塊として、暗い部屋に浮かぶ姿を見て、映像は光だったのだというところに、今さらながら気づかされたのです。

《ベール》では、男女の関係はともかく、その題名が示すように「ベール」、薄布それ自体が、主役だったのかもかもしれません。作家の真意はともかく、半透明という優げで、不自由な素材を、これほど美しく表現の中に組み入れた《ベール》は、間違いなく数あるお気に入りの1点です。

小学校 教材研究

生きる喜び その子の主題が生まれる場所

静岡県富士市立岩松北小学校 四條 秀樹よじょう ひでき

はじめに

造形表現で見せる子どもの表情は、なんと魅力的なことだろう。夢中で取り組む真剣な顔、自分の表現に納得がいかに悩み込む顔、手応えを感じてはじける笑顔…、それは生きる喜びを感じている時間なのだと思う。

図工の時間では「その子の主題が生まれる場所」を大切にしたい。なぜなら、その子の主体的な表現の原動力となるからだ。その子の表したいものが形づくられていくために、教師は素材開発や環境設定、素材との出合わせ方に力を注ぐことになる。そうすることで、自分の主題を形や色で表すために素材の特徴をどう生かしたらよいかという「問い」が、その子の中に立てられる。その問いを探りながら、「これが私です」という造形表現を楽しむ豊かな時間がつくり出されていく。

実践1「黒の造形をつなげる」(4年生)

【木炭で木の〇〇を表す】

校庭のけやき広場で、木のことを感じ取ることから始めた。肌触りや大きさ、温かさなどを体全体で感じることで、「どっしりとした感じ」「つるつるした太い幹」「春風にそよぐ葉っぱ」などとその子の表したいものが生まれてきた。与えた描画材料は「木炭」。初めて出合う画材を手に、黒だけで線描をした。色を1色に絞ることで、線の表現に子どもの意識が集中していった。

【墨で遊ぶ 墨と遊ぶ 墨を遊ぶ】

墨と遊ぶ時間。書写の時間の筆の約束から解放された子どもは、面で塗る、にじませる、絵を描く、垂らすなどの遊びの中で、墨の特徴を感じ取っていった。大きな紙や和紙、キッチンペーパーなどを用意し、目の前につくり出される黒の違いを楽しんだ。墨と遊ぶ中でさまざまな黒に出合った子どもに、「いろいろな黒をつくりたい」という主題が生まれていった。子どもは、薄める水の量を調節したり、筆圧や筆先の使い方を変えたりして、さまざまな黒の表現に夢中になった。この後、お話の絵の一場面を墨で表現した。

【四季花鳥図屏風の鑑賞】
静岡県立美術館から「四季花鳥図屏風」(レプリカ)を借用し、水墨画の鑑賞授業を行った。友達との対話から、自分の



中に物語という主題が生まれていく。とがった山を鬼ヶ島に見立てた子どもは、鬼退治に行く物語を友達に語った。多様なものの見方・考え方のやりとりの経験が、「芸術を生み出す素晴らしさ」「自分と違った見方ができる友達よさ」「その友達とつながる自分」を感じ、「生きる喜び」を味わえる時間となった。

【木版画で表す】

今後、これまでの黒の造形を木版画につなげる。白と黒のバランスを教材の本質と捉え、子どもに関わっていききたい。棟方志功の版画との出会いから、その子の主題が生まれるように構想したいと考えている。

実践2「ぼくもわたしもアートする」 夏のワークショップ



夏休みに富士芸術村を会場に行っているワークショップが今年で5回目を迎えた。市内の先生方と市内の小学生で、これまで「森の妖精」「森の妖怪」「ぼくもわたしもどろんこ隊」土壁づくりなどのテーマ

に沿った造形表現を楽しんできた。昨年は、「進め海賊船！ 海の宝は森の中」をテーマに、小学生、先生方、静岡大学の学生の80名ほどで流木の海賊船をつくり、古民家は竜宮城に変身させた。ワークショップは、海の命である水を送り出す森にこそ、海の宝があるという設定を、有志の先生たちで劇化するところから始めた。芸術村村長さんが森の神様として登場。この二日間だけのオリジナルソングも入れ込んだ。子どもの中に主題が生まれるしかけてある。子どもたちは、海の宝を探そうと、森を進む海賊船を夢中になって制作した。また、竜宮城には吊り下げアートとして、ビニル、セロハン、ペトボトルなどの透明材を活用し、海の中の様子を表現した。隔年で行われているこのワークショップは、普段の学校の授業ではなかなかできない、ダイナミックな共同制作が大きな魅力となっている。また、市内の1年生から6年生が共同でつ



くることで、そこに新しい仲間が生まれることも大きな魅力である。そして市内の先生方にとっても、素材開発という意味で、普段の授業づくりのヒントにもなっている。本年度は、教師仲間と世界文化遺産に登録された富士山を題材に選んだ。芸術村の庭に、灯籠の火で浮かび上がった貼り絵の富士の山は幻想的だった。教師自身が、造形表現を体験することで、自分の中に「できるだけ北斎に近づく」「ユニークな富士山」などという主題が生まれてくることを実感し、表現の喜びを味わった時間になった。

おわりに

持続発展教育（ESD：Education for Sustainable Development）の実践を重ねている本校は今年度、ユネスコスクールの認定を受けた。総合的な学習を軸に進められているが、造形教育がESDとどう結びついていくのかを、今後研究していきたい。ESDは、今の学習が未来につながっていることを実感できる学びの創造を目指す。そういう意味では、これからの時代に造形教育が担う役割について、改めて問い直す機会にもなる。少なくとも、自分で問いを立て、探り、表現していく力の育成は、造形教育の大きな役割だと思う。そのためにも、素材との出会いをはじめ、その子の主題が生まれる場所をこれからも大切にしながら、私はまた、たくさんのお友達の素敵な子どもの表情に出会いたいと思う。

鑑賞という「言語活動」 ～セルフエスティームを育みながら～

佐賀県唐津市立名護屋小学校 校長 ^{うしまる かずと} 牛丸 和人

はじめに

美術、音楽、体育といった教科は、どうしても子どもたちの「得手・不得手」が級友の前で露呈してしまう教科である。特に思春期にある中学生にとって、技術面の善し悪しを繰り返し比較され、級友の前に晒さらされることは、非常に屈辱的なことであるといっても過言ではないだろう。美術教育の目的はアーティストの養成ではなく、美術という教科を通して「人格の完成」「生き抜く力の育成」をめざすことなのである。そういう意味で、学習指導要領において、すべての教科で「言語活動」の充実が示されたことは非常に意義深いことであると考えられている。美術教育においてコミュニケーションを活性化させることは、生徒達の感性を刺激するというデリケートな課題でもあり、そのためのきめ細かな指導方法の工夫・改善もすべての美術教師に求められていると言えよう。

言語活動の活性化のために 配慮したいこと

言語活動の充実は、生徒一人一人の人間性（性格）や感性（感受性・表現力）への刺激を与えることである。私たち教師は、自らの変化や成長はそっちのけで、ついつい生徒だけに成長を求めがちである。学習指導案にも「…させる。」という言葉が氾濫し、教師自らが「…を支援する。」「…を準備する。」といった指導のポイントが具体的に

に示されているものが非常に少ない。生徒に何かをさせることだけを検討するのではなく、まずは言語活動を取り入れた授業づくりに際して、教師サイドが指導方法の工夫・改善に努めなければならない。その際配慮しておきたいことは以下のようなことであると私は考える。

①教師自身のコミュニケーション能力の向上

言語活動の充実を、賑やかに単発的な意見が飛び交うこととだけとらえてはならない。個々の意見を集団で共有したり、じっくりと検討したりすることもまた、言語活動の充実なのである。そのためには、教師自身が生徒の意見をよく聴き、復唱したり補足したりしながら、広げていくというスキルを高めていかなければならないだろう。コミュニケーション能力の高まりは、決して生徒だけの課題ではないはずである。思春期にある生徒一人一人のセルフエスティーム（自己尊重）を大切にしながら、互いの考えを尊重し合う集団づくりを図っていかなければ、言語活動の充実が難しいはずである。授業中、教師は以下のようなコミュニケーションのスキルを意識しなければならないだろう。

○傾聴

生徒の発言を最後までしっかりと聴く。生徒達には、どのような発言に対しても抑おさゆしないで尊重するように約束させる。

○「ミラーとリード」

できる限り「生徒の使った言葉」をミラー（鏡）のように復唱し、不足していると思われる点につ

② 生徒が安心して意見を述べたり、意見交換したりするための手だて

生徒達に作品だけ見せて、口頭で指示を与えて鑑賞させるといった乱暴な指導は避けたい。必ず生徒達の言語活動を補助するような「ワークシート」や「作品の提示の仕方」等を工夫したい。前置きが長くなったが、以上のような配慮を最低限踏まえながら、鑑賞の授業を展開したい。

題材について

題材名「私なら、この作品にはこんな名前をつけたい」

B 鑑賞(1) ア・イ

開隆堂の教科書、「美術1」「主役を探そう」2枚の絵を見比べよう」のページを使う。

ここには葛飾北斎の浮世絵「富嶽三十六景 尾州不二見原」とピーテル・ブリューゲル(父)の「イカロスの墜落のある風景」が紹介されている。いずれも日本美術と西洋美術の秀作である。それぞれの作品で興味深いのは、富士山やイカロスといった主人公が一見気づかないような大きさに配置されていることである。鑑賞者の中には「題名」に促されて富士山やイカロスに気づく者も少なくないのではないだろうか。つまり、時として「題名」そのものが鑑賞者に大きな心理的影響を与えるのである。

そこで今回は、生徒にそれぞれの作品の題名を



①「富嶽三十六景 尾州不二見原」葛飾北斎
②「イカロスの墜落のある風景」ピーテル・ブリューゲル(父)

つけさせることで、子どもたちの感性を刺激するとともに、互いの思いを言語活動によって交流させることでねらいに迫ることにした。

授業実践(授業の流れと配慮点)

(1) それぞれの作品を、プロジェクターや電子黒板を使って大きく提示する

⑦ できる限り解像度を高くし、細かい部分まで見やすいようにする。

① 見えにくい席の生徒には、見やすい位置まで移動するように促す。

(2) 本時のめあてや約束を伝える

⑦ 自分の感性を大切にしながら「題名」を考えることや、すべての級友の意見を尊重することを促す。

(3) ワークシートに記入させる

⑦ 音声言語を活性化させるためには、文字

言語で思いを記述させることが非常に大切である。これは回収して評価にも生かせる。

① ワークシートの内容

・それぞれの作品の縮小した画像①と②

・私が考えた題名①と②

・この題名をつけた理由①と②

・意見交換の後、友達がつけた題名で印象深かったもの

(4) グループによる意見交換をさせる

⑦ グループには司会役を決め、一人2分を目安に意見発表をする。

① 発表後2分を目安に質問タイムを設ける。

⑦ 教師は机間指導・支援を行い、意見交換が円滑に進むようにサポートする。

(5) 全員で個々の思いを共有(共感)する。

司会役の生徒が、各グループで出された「題名」を理由と共に紹介する。

(6) まとめ

教師が本時の学習活動についてコメントし、それぞれの作品の題名を紹介し、教科書につなぐ。

おわりに

この学びを広げるためには、今後制作する作品に気持ちを込めた「題名」をつけさせてもよいだろう。教師と生徒双方の言語活動の充実、美術教育の活性化に深く関わっているということを忘れてはならないと思っている。

※本実践は前任の中学校のものです。

イメージの広がりを楽しむ図工

神奈川県厚木市立依知小学校 ^{おしだ あきこ} 押田 彰子

校庭の木々は、緑をたたえて生命力が満ちあふれています。お気に入りの木を1本定め、まずはクロッキー。根っこまで入れることだけを条件にして描きました。出来上がったコンテの画面を軽くこすってみたら、何だか味のある画面になりました。このクロッキーは小さい紙に30分で終了し、さてもう一度改めてじっくりと枝や梢を眺めます。

「小さくなった自分があそこで遊ぶとしたら…。」「あの幹には実は…」など今度は大きな画面に描き始めた子どもたちは、想像が膨らんで自然と物語が出来上がっていきます。言語活動も活発になり、互いに物語を語り始めます。

子どもたちを、ただモチーフの前に立たせても想像する心はなかなか広がりますが、彼らの感性に合った素材や材料で入口を開けてやることで自由になり、イメージはその子独自のものとなるのです。絵画だけでなく、造形遊びも工作もそして鑑賞も、材料

や作品をただ豊富に準備しても子どもたちの想像力は刺激されません。

ほんの少し、窓口を開けてやることで、楽しみながらどんどんイメージを広げ、創造していくのです。我々教師は、始めの小さな窓をいかに開けてやるか考



えなければなりません。

今回は出来上がった「想像の木」とともに始めのクロッキーも廊下に展示しました。

図工室 美術室

動き出す、ふしぎな世界

埼玉県行田市立西中学校 ^{やまぐち あい} 山口 愛

小さな頃、テレビで見たアニメのキャラクターに夢中になり、時間を忘れて絵を描き続けた体験。それが今の職業につながる原点だった気がします。

現在、中学校で美術を教えながら、生徒の絵や発想の端々にもアニメーションへの親しみを強く感じています。「好きだから、自分でもやってみよう。」これが一番の創作意欲になると考え、2年でパラパラアニメーションの授業を行いました。最初の年は適切な紙の大きさや厚さがつかめず、思いのほか1枚1枚の絵を描く時間がかかってしまい、思い描いたストーリーや動きを表現しきれなかった生徒が続出しました。そのため翌年は、紙のサイズを大幅に縮小し、薄くしたところ、1枚の紙に絵を描く時間が短縮され、アニメーションならではの「ス



トリー展開の表現」「物やキャラクターの動かし方」「カメラワークの変化のさせ方」に時間をかけてこだわり、最後にはセリフや音響も入れ、総合演出したアニメーションを完成させることができました。1学期をかけてできあがった作品は1作品ほんの数十秒

ですが、上映して鑑賞した時の生徒達の誇らしそうな顔はいつまでも忘れられません。

そして何より、私自身が生徒と一緒にアニメーションの地道さに泣いたり、絵が動いた時の嬉しさに歓声をあげたりしながら授業づくりを楽しんで行うことができました。これからも、たくさんの題材に興味をもち、心からワクワクしながら取り組んでいける授業をつくっていきたいです。そして生徒と一緒に表現することの喜びを感じていきたいです。

今月の

見つけたよ!



「虹の橋をわたるチーターの親子とわたし」

山形県山形市立山寺小学校 4年

作者：

この絵で私が気に入っているところは、お母さんチーターが子どものチーターをやさしくくわえているところと、雲に花がさいているところです。チーターが歩いているところに虹を描いて、虹の橋を渡っているようにしました。描きながら自分もチーターに乗っているみたいでとても楽しかったです。

指導者：

「たこ絵の具」を使って色水遊びをしました。その時にできた模様を見つめさせ、いろんなことを思いつくように誘いました。作者はじっと見つめて、チーターの毛並みの模様を見つけ、思いを広げることができました。

第2回全国年賀状 版画コンクール

版画がより身近になることを目的として、日本版画院主催による「第2回全国年賀状版画コンクール」が実施されます。小さな版画づくりを通して、芸術の楽しさや創作の喜びを感じてください。皆様のご応募をお待ちしています。



第1回最優秀賞（子供の部）



第1回入選者作品は平成25年第63回版画院展会場に展示されました。

募集期間：平成26年1月10日（金）～1月31日（金）

募集部門：子供の部（幼稚園児・小学生・中学生）

大人の部（高校生・大学生・一般）

募集作品：版画全般（木版、ゴム版、銅版他、版種は自由）

主催：日本版画院（03-3701-0663）

応募方法等、詳しくは12月より下記日本版画院ホームページに掲載されますのでご覧下さい。<http://www.nipponhangain.com>